

ウィトゲンシュタインの宗教理解への視点

伊 藤 潔 志

はじめに

I 遺稿の全体構造

(1) 遺稿の分類

(2) 二つの日記

II 私的生活への接近

(1) 発言記録

(2) 伝記研究

おわりに

はじめに

本稿は、「ウィトゲンシュタイン (Ludwig Josef Johann Wittgenstein, 1889-1951)¹⁾ の宗教理解と宗教哲学に関する研究」の一部である。前々稿で

キーワード：宗教，信仰，生活

1) 本稿でウィトゲンシュタインのテキストは，下記のものを使用した。引用にあたっては，略号の後に頁数（DT については原文の頁数，DLP については命題番号）を示した。

TB: *Tagebücher 1914-1916*, in: *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe*, Band I, Surkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1984. (『草稿』)

GT: *Geheime Tagebücher 1914-1916*, Wilhelm Baum, hrsg., Taria und 丱

は前期ウィトゲンシュタインの哲学の宗教的な意味を探り、前稿ではウィトゲンシュタインとトルストイとの影響関係を論じた。それらの議論を踏まえ本稿では、ウィトゲンシュタインの宗教理解を解明するための視点を提示することを目的とする。

一般にウィトゲンシュタインの印象は、分析哲学あるいは言語哲学に決定的な影響を与えた哲学者、といったものだろう。しかし、そうした印象に反し、ウィトゲンシュタインが宗教に大きな関心を寄せていたことは、ウィトゲンシュタインの伝記研究の成果から、現在では異論の余地がないところである。たとえばウィトゲンシュタインは、友人で弟子のドゥルーリー (Maurice O'Connor Drury, 1907-1976) との会話の中で、次のような発言をしている。

私は宗教的な人間ではないが、あらゆる問題を宗教的な視点から見ずにはいられない²⁾。

-
- ↙ Kant, Wien, 1991. (『秘密の日記』)
 TB: *Tagebücher 1914-1916*, in: *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe*, Band I, Surkamp Verlag GmbH, 1995. (『論考』)
 TLP: *Tractatus Logico-Philosophicus*, in: *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe*, Band I, Surkamp Verlag GmbH, 1995.
 VB: *Vermischte Bemerkungen*, in: *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe*, Band VIII, Surkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1984. (『雑考』)
 DT: *Denkbewegungen: Tagebücher 1930-1932, 1936-1937*, Ilse Somavilla, hrsg., Haymon Verlag, 1997. (『哲学宗教日記』)

なお、訳出にあたっては、次の訳書を参照した。

- 奥雅博訳『ウィトゲンシュタイン全集』第1巻、大修館書店、1975年。
 丘沢静也訳『反哲学的断章 文化と価値』青土社、1999年。
 イルゼ・ゾマヴィラ編、鬼界彰夫訳『ウィトゲンシュタイン 哲学宗教日記』講談社、2005年。
 丸山空大訳、星川啓慈・石神郁馬解説『ウィトゲンシュタイン『秘密の日記』第一次世界大戦と『論理哲学論考』』春秋社、2016年。

2) M. O'C. Drury, "Some Notes on Conversations with Wittgenstein," in: ↗

この発言はドゥルーリーをひどく驚かせたらしく、ドゥルーリーは「ウィトゲンシュタインの思想の中には、まだほとんど無視されている次元があるのではないか」³⁾と自問し、さらに「私は、『哲学的考察』が『神の栄光に』贈られることができたかもしれないことを理解していただろうか？ または、『哲学的探求』で議論された問題が宗教的な視点から理解されていることを理解していただろうか？」⁴⁾と言っている。このウィトゲンシュタインの発言は、同じく弟子で友人だったマルコム (Norman Malcolm, 1911-1990) をも驚かせ、マルコムのウィトゲンシュタイン像に変更を迫った重要な発言である。

こうした事実に基づき、欧米ではウィトゲンシュタインの哲学から宗教的な意味を読み取ろうとする研究が、とりわけ後述の『思考運動——日記1930～1932年、1936～1937年——(Denkbewegungen: Tagebücher 1930-1932, 1936-1937)』(1997年。以下では『哲学宗教日記』と記載する)の発見後、盛んである⁵⁾。こうした研究の動向を踏まえ、本研究では、ウィトゲンシュタインの宗教哲学の実相を解明することを目的とする。

しかし、ウィトゲンシュタインの宗教哲学という主題は、決して一筋縄ではいかない。というのもウィトゲンシュタインは、宗教についてほとんど語っていないからである。したがって、ウィトゲンシュタインの哲学から宗教的な意味を読み取ろうとすることは、そのままでは牽強附会になる恐れもある。たしかに、ウィトゲンシュタインにとって宗教が重要な関心事であったことは、疑いえない。しかしそれだけでは、「ウィトゲンシュタインの哲学は宗

↘ *Recollections of Wittgenstein*, Rush Rhees, ed., Oxford University Press, New York, 1984, p. 79.

3) *ibid.*

4) *ibid.*

5) もっとも、日本では一般的なウィトゲンシュタインのイメージが強いせいか、宗教的な観点からの業績は少ないのだが、この分野では星川啓慈が精力的に仕事をしている(星川啓慈『宗教者ウィトゲンシュタイン』法蔵館、1990年などがある)。

教的な関心によって構築されていた」とまでは言えない。それゆえ、ウィトゲンシュタインの哲学を基にウィトゲンシュタインの宗教哲学を探ることは、少なくとも現時点ではできない。

そこで本研究では、①ウィトゲンシュタインの宗教理解がどのようなものだったのかを明らかにするところから始め、②そこで明らかになった宗教理解を手がかりにウィトゲンシュタインの哲学を宗教哲学として読み直す、という二段階で議論を進めていきたい。そして、ウィトゲンシュタインの宗教理解を解明する際に注目されるのが、ウィトゲンシュタインの私的生活である。したがって本研究では、ウィトゲンシュタインの私的生活において宗教がどのように理解されていたのかを可能な限り明らかにした上で、それがウィトゲンシュタインの哲学にどのように関わっているのかという議論に移っていくことになる。

このような問題意識から本稿では、ウィトゲンシュタインの私的生活からその宗教理解を明らかにするための、道筋を示したい。このとき重視されねばならないのは、ウィトゲンシュタインの草稿や日記、手紙、発言録の類である。

I 遺稿の全体構造

ウィトゲンシュタインが宗教をどのように理解し、どのような関心を持っていたのかを明らかにするためには、ウィトゲンシュタインの遺稿の他、ウィトゲンシュタインと近しかった人たちによる証言、またそれらに基づく伝記などを参照する必要がある。本節では、そのうちウィトゲンシュタインの遺稿について取り上げる。ウィトゲンシュタインの遺稿は二万頁という膨大な量にのぼるが、一口に「遺稿」と言ってもその種類は様々である。そこで、まずウィトゲンシュタインの遺稿の全体像を整理するところから始めよう。

(1) 遺稿の分類

ウィトゲンシュタインの著作と呼べるものは、周知のように『論理哲学論考 (*Logisch-Philosophische Abhandlung*)』(1922年。以下では『論考』と略記する) だけである。それ以外には小学校教員時代に書かれた『小学校のための辞書 (*Wörterbuch für Volksschulen*)』(1926年) があるくらいで、論文も公表されたものは「論理的形式についての若干の考察 (Some Remarks on Logical Form)」(1929年)のみである。一般に後期ウィトゲンシュタインの「主著」とされる『哲学的探究 (*Philosophische Untersuchungen*)』(1953年。以下では『探究』と略記する) も、遺稿に属するものであって、著作ではない。実際のところ、ウィトゲンシュタインの「著作」のほとんどは、遺稿である。これらの遺稿のうち、ウィトゲンシュタインの私生活から宗教理解を探る際に注目すべきは、最終稿に近い「著作」よりも準備稿に近い手稿、あるいは日記や手紙などである。

ウィトゲンシュタインの遺稿の取り扱い、ウィトゲンシュタインが生前に遺稿管理人に指名していた弟子たち、すなわちリース (Rush Rhees, 1905-1989)、ライト (Georg Henrik von Wright, 1916-2003)、アンスコム (Gertrude Elizabeth Margaret Anscombe, 1919-2001) の三人の手に委ねられた。そして遺稿は、この三人によって収集・整理・出版された。ウィトゲンシュタインの死後に出版された「著作」は、遺稿管理人が遺稿の中で重要だと判断した部分である。しかし、それらの「著作」にも、最終稿と呼びうるものから準備稿のようなものまでの混在が認められる。

そこで遺稿の全体像を、遺稿管理人の一人であるライトの報告を基にまとめてみよう⁶⁾。ライトは、ウィトゲンシュタインの遺稿を次の五つのグループに分類している。

6) フォン・ライト (飯田隆訳)「ウィトゲンシュタインの遺稿」(飯田隆編『ウィトゲンシュタイン読本』法政大学出版局, 1995年, 335～374頁所収)を参照のこと。

ウィトゲンシュタインの遺稿の分類

- ① 手稿（一次手稿，最終手稿）
- ② タイプ原稿（一次タイプ原稿，最終タイプ原稿）
- ③ 口述筆記
- ④ 会話・講義の筆記録
- ⑤ 手紙

これら五つのグループのうち、遺稿の主要な位置を占めるものは、①手稿、②タイプ原稿、③口述筆記の三つのグループである。

①手稿とは草稿や日記であるが、これらはその完成度から「一次手稿」と「最終手稿」とに分けられる。「一次手稿」には『草稿1914～1916年（*Tagebücher 1914-1916*）』（1961年。以下では『草稿』と略記する）、「最終手稿」には『原論考（*Prototractatus*）』（1971年）がある。どちらも『論考』の基になっているが、後者の方がより最終稿に近い。②タイプ原稿も、その完成度から「一次タイプ原稿」と「最終タイプ原稿」とに分けられる⁷⁾。手稿よりもタイプ原稿の完成度の方が高いので、最も完成度が高いのは「最終タイプ原稿」ということになる。この「最終タイプ原稿」には、『論考』の最終稿、『探究』がある。また③口述筆記も、最終稿と同等の完成度と評価されている。口述筆記には、『青色本・茶色本（*Blue and Brown Books*）』（1958年）などがある。

なお、手稿・タイプ原稿・口述筆記には、それぞれ100番台、200番台、300番台の通し番号（いわゆる「フォン・ライト番号」）が付されている。すなわち、手稿にはMS101～MS183、タイプ原稿にはTS201～TS245、口述筆記にはD301～D311という番号が割り当てられ、整理されているのである。

7) ここでの「一次手稿」, 「最終手稿」, 「一次タイプ原稿」, 「最終タイプ原稿」という呼び方は、鬼界彰夫による（鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインはこう考えた 哲学的思考の全軌跡1912-1951』講談社現代新書、2003年、20～22頁を参照のこと）。

(2) 二つの日記

ここで触れておかなければいけないのが、ウィトゲンシュタインの二つの日記、すなわち『秘密の日記1914～1916年（*Geheime Tagebücher 1914-1916*）』（1985年。以下では『秘密の日記』と略記する）と『哲学宗教日記』である。というのも、これらの日記はそれぞれ1981年、1993年にその存在が明らかになったのだが、その内容はウィトゲンシュタインの宗教への深い関心を裏づけるもので、従来のウィトゲンシュタイン像を大きく転換するものだったからである。

まず、『秘密の日記』であるが、これはウィトゲンシュタインの第一次世界大戦従軍中に書かれたものである。ウィトゲンシュタインが戦地で書いた手稿は、『論考』の一次手稿にあたり、従来から MS101～MS103として公開されていた。そしてこれが、『草稿』として出版されていた。しかしこの『草稿』は、戦地にあったウィトゲンシュタインが三冊のノートに書きつけた手稿のすべてではなく、ノートの右側の頁だけを取り出したものであった。公開されなかった左側の頁には、ウィトゲンシュタインのより私的な日記が綴られていた。これが、『秘密の日記』である。つまり、従軍中にウィトゲンシュタインがしたためた手稿はノートの右側の『草稿』と左側の『秘密の日記』の二つからなっており、それが MS101～MS103の全貌なのである。左側の頁は遺稿管理人たちによって秘匿されていたのだが、1981年にバウム（Wilhelm Baum, 1948-）がその存在を突き止め、1985年に『秘密の日記』として出版された⁸⁾。『秘密の日記』からは、戦場のウィトゲンシュタインが死との隣り合わせの中、宗教を自らの課題にしていたことを読み取ることができる。

次に『哲学宗教日記』だが、この日記はライトの報告の中にある「遺稿目録」⁹⁾にも記載がなく、「所在不明」ともされていなかった。つまりこの日記の存在は、まったく知られていなかったのである。それが1993年、いわゆる「コー

8) この間の経緯については、奥雅博「遺稿研究の状況」（飯田隆編『ウィトゲンシュタイン読本』法政大学出版局、1995年、3～15頁所収）8～10頁を参照のこと。

9) ライト、前掲論文、342～352頁。

ダー遺稿 (Koder-Nachlass)」の一つとして、発見された¹⁰⁾。そして、1996年にライトによって正式に MS183の番号が与えられ、1997年に出版されることになった。『哲学宗教日記』にはウィトゲンシュタインの中期から後期にかけての精神史を読み取る重要な手がかりが含まれており、ウィトゲンシュタインの宗教理解を明らかにする上でもきわめて貴重な資料である。したがって、ウィトゲンシュタインの遺稿の中でも『秘密の日記』と『哲学宗教日記』とは、とりわけ重要である。

Ⅱ 私的生活への接近

ウィトゲンシュタインの私的生活からその宗教理解に迫るには、ウィトゲンシュタインの遺稿を補完するものとして、ウィトゲンシュタインの弟子・友人や親族による回想録、そしてウィトゲンシュタインの伝記をも参照していく必要がある。

(1) 発言記録

ウィトゲンシュタインについての回想録は、ウィトゲンシュタインが知人などにした多くの発言によって構成されている。こうしたウィトゲンシュタインの発言に関する証言の中には、ウィトゲンシュタインの宗教理解を示唆するものも多く含まれている。主な回想録としては、次のものが挙げられる。

ウィトゲンシュタインについての回想録

- ① ライト「ウィトゲンシュタイン小伝 (A Biographical Sketch)」(1954

10) 「コーダー遺稿」は、この『哲学宗教日記』の他、『論考』のタイプ原稿、1922年1月13日の日記の断片、1929年11月に行われた「倫理学講話 (A Lecture on Ethics)」の手稿、『探究』1～188節の最終手稿 (所在不明だった MS142) からなる。これらの遺稿が発見された経緯については、編者による序文を参照のこと (vgl., DT, S. 7.)。

年)¹¹⁾

- ② マルコム「回想のウィトゲンシュタイン (A Memoir)」(1958年)¹²⁾
- ③ パスカル「ウィトゲンシュタイン——個人的回想—— (Wittgenstein: A Personal Memoir)」(1973年)¹³⁾
- ④ ドゥルーリー「ウィトゲンシュタインとの会話の覚書 (Some Notes on Conversations with Wittgenstein)」(1976年)¹⁴⁾, 「ウィトゲンシュタインとの会話 (Conversations with Wittgenstein)」(1981年)¹⁵⁾
- ⑤ ブースマ『ウィトゲンシュタイン —— 会話, 1949~1951年 —— (Wittgenstein: conversations, 1949-1951)』(1986年)¹⁶⁾

これらは、ウィトゲンシュタインをよく知る者による回想録である。①ライトは、先にも述べたようにウィトゲンシュタインの弟子であり、遺稿管理人の一人である。②マルコムも、ウィトゲンシュタインの弟子である。これらは、ウィトゲンシュタインと親交があったラッセル (Bertrand Arthur

11) G. H. von Wright, "A Biographical Sketch," in: *Ludwig Wittgenstein, a memoir*, Norman Malcolm, 2nd ed., Oxford University Press, New York, 2001.

12) Norman Malcolm, "A Memoir," in: *Ludwig Wittgenstein: a memoir*, Norman Malcolm, 2nd ed., Oxford University Press, New York, 2001.

13) F. Pascal, "Wittgenstein: A Personal Memoir," in: *Recollections of Wittgenstein*, rev. ed., Rush Rhees, ed., Oxford University Press, New York, 1984, pp. 12-49.

14) M. O'C. Drury, "Some Notes on Conversations with Wittgenstein," in: *Recollections of Wittgenstein*, rev. ed., Rush Rhees, ed., Oxford University Press, New York, 1984, pp. 76-96.

15) M. O'C. Drury, "Conversations with Wittgenstein," in: *Recollections of Wittgenstein*, rev. ed., Rush Rhees, ed., Oxford University Press, New York, 1984, pp. 97-171.

16) O. K. Bouwsma, *Wittgenstein: conversations, 1949-1951*, J. L. Craft and R. E. Hustwit, ed., Hackett Publishing, Indianapolis, 1986.

William Russell, 1872-1970) が語った逸話とともに、最も古典的な位置を占める。

これらに加え、③ウィトゲンシュタインのロシア語の家庭教師だったパスカル (Fania Pascal)、④ウィトゲンシュタインの弟子のドゥルーリー、⑤晩年の友人であるブースマ (Oets Kolk Bouwsma, 1898-1978) の回想録も重要である。特にドゥルーリーの回想録は、ウィトゲンシュタインの宗教理解を探る上で、貴重な情報を提供してくれている。

(2) 伝記研究

ウィトゲンシュタインの遺稿や上記のような回想録に、さらに新しい証言や資料を加味してウィトゲンシュタインの生涯の全体像を捉えようとするのが、伝記研究である。ウィトゲンシュタインの伝記で重要なものとしては、次のものが挙げられる。

ウィトゲンシュタインの伝記

- ① トゥールミン、ジャニク『ウィトゲンシュタインのウィーン (Wittgenstein's Vienna)』(1973年)¹⁷⁾
- ② マクギネス『ウィトゲンシュタインの生涯——若き日のルートウィヒ、1889～1921年—— (Wittgenstein: A Life: Young Ludwig, 1889-1921)』(1988年)¹⁸⁾
- ③ モンク『ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン——天才の義務—— (Ludwig Wittgenstein: The Duty of Genius)』(1990年)¹⁹⁾

17) Allan Janik and Stephen Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, Simon and Schuster, New York, 1973.

18) Brian McGuinness, *Wittgenstein: A Life. Young Ludwig, 1889-1921*, Penguin Books, London, 1988.

19) Ray Monk, *Ludwig Wittgenstein: The Duty of Genius*, Penguin Books, New York, 1991.

これらのうち、①トゥールミン (Stephen Edelston Toulmin, 1922-2009) とジャンク (Allan Janik, 1941-) とによる報告は、必ずしも伝記研究とは言えないが、ウィトゲンシュタインの哲学を19世紀末ウィーンの文化・思想状況の文脈に位置づけ、『論考』の要点は倫理的なものだと主張している²⁰⁾。ウィトゲンシュタインへのこうした接近は、ウィトゲンシュタインの私生活からその宗教理解を明らかにしようとする上でも参考になるとともに、ウィトゲンシュタインの哲学に宗教的な意味を見出そうとする際にも重要な示唆を与えてくれる。

②マクギネス (Brian McGuinness, 1927-) は、ウィトゲンシュタインの親族や友人から得た資料や証言を基に、ウィトゲンシュタインの前半生を詳細に描いている。また③モンク (Ray Monk, 1957-) も、未刊行の遺稿や証言を丹念に調べ上げている。この二人に対照的なのは、『秘密の日記』の取り扱いである。マクギネスが『秘密の日記』にあえて立ち入らなかったのに対し²¹⁾、モンクは必要だと判断したものについては『秘密の日記』からも引用している²²⁾。どちらも本格的な伝記研究で、ウィトゲンシュタインの伝記研究を大きく進展させた。ウィトゲンシュタインの伝記的事実を参照する際には、大いに参考になる。

これら三つの業績に共通しているのは、ウィトゲンシュタインは論理的なものと同時に倫理的なものをも問題にしていた、と解釈していることである。こうした見解は、後に発見され出版された『哲学宗教日記』と併せ、ウィトゲンシュタインの宗教理解を明らかにするための重要な手がかりになる。本研究でも、こうしたウィトゲンシュタインの伝記などは、適宜参照していく。

20) cf., Allan Janik and Stephen Toulmin, *ibid.*, p. 169.

21) cf., Brian McGuinness, *ibid.*, p. 212.

22) cf., Ray Monk, *ibid.*, p. 585.

おわりに

『草稿』、『秘密の日記』、『雑考 (*Vermischte Bemerkungen*)』(1977年)、『哲学宗教日記』といったウィトゲンシュタインの手稿には、ウィトゲンシュタインの宗教に関する言及が数多く含まれている。それらの記述からは、ウィトゲンシュタインの宗教に対する関心が大きいこと、そしてそれが前期から後期に至るまで一貫していることが分かる。このことは、ウィトゲンシュタインの伝記研究にも裏づけられている。しかし、そうしたウィトゲンシュタインの記述は、あくまでも断片的な書きつけである。それゆえ、ウィトゲンシュタインが宗教に対して強い関心を持っていたという状況証拠にはなるだろうが、ウィトゲンシュタインの宗教理解がいかなるものであったのかを明瞭に示してくれるわけではない。

ウィトゲンシュタインの宗教理解の実相を探り、その特質を明らかにするためには、無秩序に溢れている記述・発言・証言を整理するための視点が必要になる。そこで本研究では、ウィトゲンシュタインの宗教理解を含む人生観に大きな影響を与えた、もしくはウィトゲンシュタインが深く共感した人物に手がかりを求め、次のような手順で考察を進めていきたい。すなわち、①まずウィトゲンシュタインがそれらの人物に言及している箇所を中心に検討することから始め、ウィトゲンシュタインがその人物からどのような影響を受けたのか(または受けなかったのか)、その人物のどこに惹かれたのか(または反発したのか)を明らかにする。②そして、ウィトゲンシュタインの人生観とその人物の人生観との共通点・類似点・相違点を起点に、ウィトゲンシュタインの宗教理解の特質を明らかにしていく。

もっともウィトゲンシュタインは、フレーゲ (Friedrich Ludwig Gottlob Frege, 1848-1925) やラッセルといった論理学者を始め、さまざまな人物から影響を受けていると考えられる²³⁾。しかし、こと人生観への影響を考えると、

23) ウィトゲンシュタイン自身は、1931年の手稿の中で「私は、ボルツマン、ヘルツ、ショーペンハウアー、フレーゲ、ラッセル、クラウス、ロース、ワイニンガー、シュベングラー、スラッフアから影響を受けた」(VB, S. 476) と言っている。

次のライトの証言が参考になる。

ウィトゲンシュタインは、狭い意味での哲学者からよりも、哲学・宗教・詩の境界にいる著者から深い感銘を受けた。それは、聖アウグスティヌス、キルケゴール、ドストエフスキー、トルストイである²⁴⁾。

そこで本研究では、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430)、キルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard, 1813-1855)、ドストエフスキー (Fjodor Michailowitsch Dostojewsky, 1821-1881)、トルストイ (Lev Nikolayevich Tolstoy, 1828-1910) の四人をウィトゲンシュタインの宗教理解を探るための入口としていく。その上で、ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) など、その他の思想家についても適宜、触れていくことにする。

こうして本研究では、ウィトゲンシュタインとこれらの思想家との関係について順次、論じていくことになるのだが、ウィトゲンシュタインとキルケゴールとの関係、ウィトゲンシュタインとトルストイとの関係については、それぞれ前々稿、前稿で論じている。したがって今後は、アウグスティヌス

ゝる。このうち、ボルツマン (Ludwig Eduard Boltzmann, 1844-1906) とヘルツ (Heinrich Rudolf Hertz, 1857-1894) とは物理学者、クラウス (Karl Kraus, 1874-1936) は批評家、ロース (Adolf Loos, 1870-1933) は建築家、ワイニンガー (Otto Weininger, 1880-1903) は哲学者、シュペングラー (Oswald Arnold Gottfried Spengler, 1880-1936) は歴史学者、スラッフア (Piero Sraffa, 1898-1983) は経済学者である。ここで名前が挙げられている中で、本研究の関心から特に注目されるのは、ショーペンハウアーである。またウィトゲンシュタインは、賞賛と尊敬の念をもってアウグスティヌス、ショーペンハウアー、キルケゴールについて言及したとも言われている。

24) G. H. von Wright, "A Biographical Sketch," in: *Ludwig Wittgenstein: a memoir*, Norman Malcolm, 2nd ed., Oxford University Press, New York, 2001, p. 19.

とドストエフスキーの二人について、ウィトゲンシュタインとの関係を論じていくことになる。ここでは、アウグスティヌスについて簡単に触れておこう。

ウィトゲンシュタインは、第一次世界大戦で捕虜になった折にアウグスティヌスの『告白(Confessiones)』(400年)を初めて知り、それを愛読するようになった。その後ウィトゲンシュタインは、『茶色本』、『哲学的文法(Philosophische Grammatik)』、『探求』において、たびたびアウグスティヌスの名前を挙げ、その言葉を引用している。もっとも、これらはアウグスティヌスの言語観を引き合いに出したものであって、必ずしも本研究の関心に応えるものではない。

ただしマルコムによると、ウィトゲンシュタインが『探求』をアウグスティヌスの引用から始めたのは、アウグスティヌスが偉大な精神の人だったからだという²⁵⁾。またウィトゲンシュタインは、ドゥルーリーに「『告白』は、最も真剣な本かもしれない」と発言している²⁶⁾。ウィトゲンシュタインは真に宗教的な人間の典型の一人としてアウグスティヌスの名前を挙げているが²⁷⁾、こうした証言からもアウグスティヌスがウィトゲンシュタインの宗教理解に何かしらの影響を与えたと考えてもよいだろう。

アウグスティヌスの他、キルケゴール、ドストエフスキー、トルストイにウィトゲンシュタインが大きな影響を受けた、もしくはこれらの思想家に深く共鳴していたということは、これまでの伝記研究においても指摘されていることである。したがって、ウィトゲンシュタインとこれらの思想家との関係それ自体は、さほど大きな問題ではない。問題は、その関係がどのようなものだったのかである。しかしこの問題については、これまで十分に論じられてこなかった。本研究で明らかにするのは、その関係の内実である。次稿では、ウィトゲンシュタインの宗教理解を明らかにすることにしたい。

25) cf., Ray Monk, *ibid.*, p. 414, p. 531.

26) cf., M. O'C. Drury, *ibid.*, p. 90.

27) cf., Norman Malcolm, *ibid.*, p. 36.

参考文献

- O. K. Bouwsma, *Wittgenstein: conversations, 1949-1951*, J. L. Craft and R. E. Hustwit, ed., Hackett Publishing, Indianapolis, 1986.
- 星川啓慈『宗教者ウィトゲンシュタイン』法蔵館, 1990年。
- 飯田隆編『ウィトゲンシュタイン読本』法政大学出版局, 1995年。
- Allan Janik and Stephen Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, Simon and Schuster, New York, 1973.
- 鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインはこう考えた 哲学的思考の全軌跡1912-1951』講談社現代新書, 2003年。
- 黒崎宏『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』勁草書房, 1980年。
- 『ウィトゲンシュタインが見た世界 哲学講義』新曜社, 2000年。
- Norman Malcolm, *Ludwig Wittgenstein, a memoir*, 2nd ed., Oxford University Press, New York, 2001.
- Brian McGuinness, *Wittgenstein: A Life. Young Ludwig, 1889-1921*, Penguin Books, London, 1988.
- Ray Monk, *Ludwig Wittgenstein: The Duty of Genius*, Penguin Books, New York, 1991.
- Rush Rhees, ed., *Recollections of Wittgenstein*, Oxford University Press, New York, 1984.